The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日常編集家アサダワタルさんインタビュー ： 「居場所」という思考を即興で作る
Author(s)	
Citation	臨床哲学のメチエ. 2014, 21, p. 15-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/40498
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「居場所」という思考を即興で作る

2013/8/13
聴き手
川崎唯史　菊竹智之

アサダワタルさんは、「日常編集家」を名乗り、音楽、文章、プロジェクトなど広い意味でアートと呼べるものを通じて、公私や分野などに裂かれてしまった様々な既存の価値観を編み直すことを試みる。

「家」という空間を閉じきったものではなく公私の入り乱れる場としてとらえ直す「住み開き」の提唱など、様々な形で新しい場所を開くことに携わってきたアサダさんにとって、「居場所」とは何なのだろう。

色々な「居場所」

――アサダさんはこれまで、直接具体的な場所に関わることも含め、様々な意味で居場所というものに関わってこられたのではないかと思います。まず、そんなアサダさんが「居場所」と聞いてその言葉についてどんなことを思うか聞いてみたいのですが。

居場所という言葉についてですか。色んなタイプの居場所があると思うから一つの答えではないんだけど、一つは、一人で居られる時間や自分に向き合える時間を大事にできる居場所っていうのが、必要だと思っていること。次に、自分だけじゃなくて人と共有する居場所みたいなのがあって。後者の方は、どんどん居場所の質が入れ替わっていく。その時々の自分の関心や相手の関心との関係性や交わりあうタイミングが合って、そして「今ここが居場所なんやな」ってなると思います。そういう一緒にお話しができる広い意味での仲間意識みたいなものを共有できる居場所っていうのは、どんどん変化していって、その居場所自体もメンバーが入れ替わったり、自分もひょっとしたらその居場所から抜けていく、あるいは卒業していくとか。だから、自分のコアな部分に対して一人で内面的に向き合う居場所と、そうやって入れ替わっていく、どんどん卒業していく、けれども同時に次の新たな出会いがある居場所みたいのが、大きく二つあるかな、って思ってます。

そしてね、その二つが交じり合う場所みたいなのもあるとは思うんですよ。自分の素直な関心とか、自分に内省的に向き合っていることからちょっとずつ開いていって、そこに少しずつ他者が入ってくる感覚。僕にとっては、最近「家」っていう空間をどう捉え直したらいいのかとかいう関心があることとも繋がっているかもしれませんが。

ただ、本当にその二つが混じりあえるかっていうと、なかなか難しくて、すぐにどっちかに寄っちゃう。一回開いたときに、想定以上に自分を開いてしまって、場合によってはそのことによってバランスが取れなくなったりとか、しんどくなってしまったり、ってこともあるだろうしね。

でも、人が自分一人で「自分はこんなことできるはずや」とか、「こんなんはできへんわ」、「自分はこれが好き!」みたいに考えていることを違う可能性へとこじ開けてくれるのって、自分というよりは他人だったりするんですよね。最初は抵抗あるけども、自分を開いてしまったことで他人がそこのカギをこじ開けてくれたりして後々、「自分にこんな可能性があるんや」ってことを再発見することってあるから。そういう風に「無理してるな……いま僕は」とためらいながらも、自分一人で考えていく場所から他人と共有していく場所のグラデーションの階段の段差を低いところから少しずつ上がっていくみたいな。そういう居場所のあり方が理想やなって思うけど、まあそれを求めている感じですよね、僕自身も。

居場所はどんどん変わっていく

自分が信頼している友人とか、自分のある程度コアな部分までも共有できる親友との関係、その人と共有している場みたいなものってありますよね。例えば人によってはそれは大学のサークルだったりするんだろうけど。そういう関係からいつだって抜けられるし、いつだって違うこともできるっていう選択を持っていることが前提にある中で、自分のこと、コアな部分を伝えたい、知ってもらいたい、解ってもらいたい相手、友達や恋人なんかが自分と共有している以外の世界を持ってしまうタイミン

グってあるでしょう。自分の世界を共有できる人がある時期に入れ替わっていく、その時に感じるある種の寂しさや、とはいえ自分も変わっていっていることを認識してはっとする、みたいな感覚。自分は相手が変わったと思っていたけども、相手も「おまえが変わったやろ」って言うみたいな話とか、その相手だけじゃなくて他の人にまで変わったと思われているとか。みんなね、「やっていることはちょっとずつ変わっているかも知らんけど根本的には自分はおんなじ人間や」と思っていても、意外と人って周りから見たら――別に服装が変わったとかいうレベルの話じゃなくて、――成長

とも言えるかもしれないけど――どんどんどんどんとにかく変わっていっていて。その変化に関してはある段階からもう共有するのが難しくなる。そこまで相手に関心をずっと持ち続けること自体も難しくなったりとか、違う人と変化を共有したくなったりとかするとか。

僕はそういう人間関係のつながりの中のお互いの関心の持ち方と、カフェとか部室とか、そういう具体的で物理的な場所っていうのは密接につながっていると思うんですね。だから「居場所」って言ったときの「場所」っていうのは、僕にとってはあんまりどこどこの部屋で、みたいな感触というよりも、相手との関係の持ち方の「今この瞬間やな」みたいな、「今この瞬間この人となにか共有できているな」みたいなことを、自分の中で気持ちのいいバランスで保てているときに、今ここに自分の居場所があり、それを物理的な場所が表象してくれていると。たとえば一回それが違う関係になってお互いもう一回戻ってくるみたいなときって、また同じものを共有しているような気分になっても、もう一回それぞれが生まれ変わっているからそこは違う関係になる。だから仮に物理的に同じ場所でも、違う場所になるんですよ。仮に同じメンバーであってもね。

だから、居場所には時間軸がむっちゃ密接に関わっていると思うんです。居場所の感覚っていうのは、それがないと説明できない。そういう意味においても、自分にとって常に「やっぱりここがホームやな」みたいな感覚は僕はほとんど味わったことがないんですよ。必ずここに帰ったら、このある特定の場所にあるいは特定の関係性に帰ったら一番落ち着く、みたいなときの「一番」っていうのはすごく相対的なもので、あんまりそれを一言で言えないんですね。「ここが居場所」って決められたら自分の活動や精神状態にも一本太い柱ができて楽になれるのかなっていう気はするけれども、なかなかそれは見つけられないし、今後も見つからないんじゃないかなぁと。

ちょっと話は広がってしまうんだけど、僕は人格やアイデンティティっていうか、その人の持っているキャラクターとかあるいは肩書きみたいなものも、それに自分を入れる一つの箱みたいに思っているので、この肩書でいる、あるいはこのアイデンティティでいるときが一番安心、みたいな感覚もあんまり無いんです。それは実際生きていく上でなかなか困ったものでもあるんだけども。だから居場所以前にそのアイ

デンティティそのものを編み上げていくというか、そのときそのとき築き上げていって、場合によってはまた崩して、また築き上げていくっていうことをずっとやり続けていくことによって、そのプロセスに付随して結果的に居場所もずっと作り続けていくみたいな感じなんだと思います。ある種即席、インプロヴィゼーションみたいな感じですね。

そう考えていくと、誰かと別れるとか、誰かから去っていったりまた去られたりみたいなことに対する構え方も変わるかもしれない。それが致命的ではないというか、個人的には「どっかでまた会えるから」みたいに思えている部分がその別れを楽にさせているところがある。

そういう風に、即興でその場にあるものをブリコラージュ的に援用しながら自分の中の居場所を作る、みたいな感覚を感じられるのは、多分どっかで「また会おうね」っていう感覚が一応担保されているからこそ強気で思えるんやなっていうある種の保険みたいなものが正直あるんですね。とはいえ一方では「きっとこの人とは当分会うことないんやろうなぁ」とか思ってることもあるんだけど、でもなんか、多分どこかで期待もしてるんやと思う。「きっと出会い直しがあるやろう」と。「今はそんなに心底語れなかったし、なんだかお互いすれ違ってしまったけど、また会ったときは違う関係性で一緒に居場所を作れるかもしれないよね。そのときはよろしく」みたいなことは思ったりするし。

もっと拡大すれば、仮に相手が世の中に存在しなくなってしまう、死んでしまったりとかしても、そのメッセージみたいなものは何かしら残っているというか、死者であっても対話できるものがあるのかもしれないけど。そこまでは自分の中ではまだ経験をしたことがないので、なんとも想像でしかないんだけど、そういう死者との対話にもとても興味がありますね。

ひとりの居場所を共有する

今ちょっと思い出したのが、僕が住んでいる大津の中学校でのいじめ問題が社会問題になったときに、朝日新聞のコラムコーナーで色んな方々がいじめについての思いを綴ったんですね。その中で、役者でダンサーの田中泯さんだけが、誰かにちゃんとその事実を伝えて助けてもらえみたいな内容ではなくて、「一人になれ」と。「森へ行け」と。[1] とにかく一人になって一人で過ごすっていうことの大事さを徹底して伝えていたんです。一人になることを恐れないこと。友達を作ろうとかじゃなくて、一人になるっていう時間を作ることによって強くなること。このような発想って、ちょっとずつ堂々とは言いにくくなっていると思います。

逆の方向はよく言われるんですよ。「みんなでつながろう」と。今、震災のこととか含めてとにかくメディアでは「つながり」とか「コミュニティ」みたいなものがよく言われている。僕も自分の本（『住み開き家から始めるコミュニティ』（筑摩書房）では一定そのことの大事さは伝えています。でもね、僕はそのことと一人になる時間みたいなものと、どっちもむちゃくちゃ大事やと思うんです。それは堂々とした「逃げ場」なんですよ。具体的に一人になれる逃げ場があるっていう意味もあるし、妙な言い方だけど、他人といたとしても、「今俺は一人でいる」っていう状況を自分で意図的に作ったりすることができるか、みたいなことも含めてね。それは、いきなり人前なのに堂々と目の前の人差し置いて携帯ゲームを始めるみたいなわかりやすいこと

1 朝日新聞二〇一二年七月十九日。〈http://www.asahi.com/special/ijime/TKY201207190451.html〉で閲覧可能。

を言ってるわけじゃないんです。一人になることをお互いが尊重し認め合える関係になっていったら、それはまたつながりとか絆と簡単に言われることとは違う次元のコミュニケーションっていうか。別にお互いを無視し合っているわけじゃなくて、困っていることがあるのに「いいや、俺は今一人モードだからあなたのこと手伝えません」とかいうことでもなくて。

田中泯さんは「森へ行く」みたいなことを言ってはったと思うんだけど、一人で自分に向き合う時間を、物理的に一人じゃなくても、他人と一緒にいながらもある種そういうものを意識的に作っていける環境をお互い持てれば、実はもうちょっと違ったコミュニティというか、違った尊厳、お互いのリスペクトのあり方みたいものが生まれたりするのかな。まぁ僕自身が、もうかなり一人が好きな人間なので、基本的に。

何を共有するのか

――この赤阪と菊竹の文章[2]みたいに、共有するにも語りにくいこととか、ネガティブなことはありますよね。そうしたものが開く場の核になることって、今の話のように好きなものとか思い出とかが核になるときに比べて難しいようにも思うのですが…。

僕がさっき言った「共有する」っていうのは、実は「モノ」的なことではなくて。わかりやすく「君〇〇が好きなんやね」「そうそう」っていう共有はすごくタグ化されやすいし、全部タグ付けしていったら、お互いの共有関心が検索エンジンのようにすぐ引っかかりそうな話になっていく。でもその人が仮に何を好きであったとしても、その「好きのなり方の感覚」や、その人とその好きなものとそれが存在する社会との関わり方とか、他人との関わり方とか。モノそのものというよりは、構造みたいなね。どういう発想で物事を見ているかみたいなその感覚の構造を共有できることの方がやっぱり僕はよっぽど興味があるし大事だと思うんです。そして、意外とそっちの方がすぐに気付いたりするんですよ、「あの人は近い」っていうことに。自分とは一見キャラも分野も全然違うけどその発想の構造が近いとかね。そういう感じで共感をして人はつながっていくと思うんです。もちろん、別に近けりゃいいってものでもなく、逆に言えば、自分の物事への関心の持ち方の構造がまるで違う人でも、何がどう違うかを考えればその人に対する関心が生まれいったりもしますよね。とにかく、そのモノがダイレクトに好きっていうよりは、モノに出会ったり人に出会ったり、自分とそういう対象の間にある間合いの取り方とか関係の切り結び方自体の共有感覚がどこかに生まれたときに、人ってすごく居場所を作りやすいんやなと思っているんですね。やっぱり居場所は、ただ単に「あっ、テニスやってるの、俺もやってるねん」「AKB好きなんや、俺も好きやねん」だけでは作られへんと。どう好きで、何と一緒に好きで、どういう関係性の中で今自分はその対象に対する関心を話しているか、っていうことを共有できれば、なおさらその人との間である種の居場所みたいな感覚を共有できると思うんです。この感覚はその人独自に持っている哲学みたいなものなのでそんなにガッツリ変わるものじゃない。それが根本的にがらっと変わるっていうのは、それは相当な変化だと思うし、あんま変わらへんからこそその感覚がすぐに共有できにくい人とは僕自身は無理に仲良くなろうとはしないですね。

そういう風に、関係の取り持ち方、その相手との関係の持ち方が、「モノ」的か「コ

2　本号掲載の「吸血鬼の棺」「場を開く」。アサダさんには事前に読んでいただいた。

ト」的かというか。それで全然違うつながり方が生まれる気がします。

「ネガティブ」なつながり

そうして考えたときに、ポジティブとネガティブっていう感覚も判断が難しいところがあって、それもシチュエーション次第では、ネガティブなことがポジティブに転化するときもあるんですよね。なんか、ポジティブ／ネガティブっていう感じとか、強さ／弱さみたいなものって、すごく文脈依存的に反転するっていうか。

例えば、すごく生き方として不器用な故に、その人の周りに人がついてきて、何かが生まれている人っているんですよね。その理由は説明するのが難しいことで、強いて言うなら「弱さの力」みたいなことなのかもしれない。本人が別にその力を意識しているわけでもないかもしらんし、ある種自覚をしている人もいるやろうし。何でもかんでも器用にできるとか、いつもポジティブに喋れるとかみたいな明らかにポジティブな感じのことじゃない、社会に対してすれていたりとか、何か素直に出せない感情を抱えていたりとか、明らかに物事を動かす上で器用ではない、言いたいことをうまく言語化できないっていうことに対して不思議な関心が注がれてそれが力を持つことってある。

人が相手に関心を持つときの関心の持ち方っていうのは、普通はまあ、何かができるとかそういう特長的なことを言うことが多いですよね。でも、そういう世間的に特長じゃないようなことに関心を持ってしまって、相手のことを気になるきっかけが生まれて。それは別に恋愛であろうが友達であろうがなんでもそうやと思うけど、そこから何か関係性が生まれていって、その人の弱さの力がもたらす自律的なコミュニティが立ち上がる状況は実際あるから。やっぱり、そこも関係性の中で、まるで光の当たり方が変わるというか。光がどこにどのように当てられかによって、完全に反転して、ぱっと見ネガティブなこととポジティブなものに「揺らぎ」ができて、そこですごく針が振れるみたいな。急にこっちに振れる、みたいなことですね。

そういうことを最近になってすごく思ったことがいくつかあったんですよ。「言葉になかなかできへんかったけど、この人は言葉にできない部分の魅力を持っている人なんや」みたいなことを感じるのって、僕もそれなりに歳を食ってからというか、十代〜二十代ではなかなか気づけなかったところかもしれませんね。

つながりと居場所

これまで話してきたようなことって抽象的なことだと思うし、相手に対する関心をいきなり抽象的な話で切り出すってことはできないから、まずは何か具体的なことをきっかけに話していくんですよね。そうして相手が抱えている問題意識みたいな話へとつながったときに、きっとその相手すら自覚していない、具体的な問題の奥底に潜んでいるもっと根本的な何かがあるんやなと思える時が来る。さらにその問いの持ち

方に自分が共感できたとき、そこには大きな収穫がありますよね。「自分もその問題意識の表現の仕方は違うかも知らんけど、きっとあなたとかなり近い感覚を持っているよ」ってなったときに、相手もきっと自分が向き合っていると思っていた具体的な問題に対する違ったアプローチからのブレイクスルーが起きることがあって。だから一方では、自分はなんで今ここでこういう風に感じているんやろ、といった感覚に対して一人で向き合いながら問いの立て方をどんどん変えていく。一人で筋トレをするみたいなね。それこそ哲学の存在がまさにそうかも知れない。でも同時に、他者との対話を重ねていく過程で絶対自分の筋トレだけでは普段使わない筋肉が使わされてしまうことで、これまでまったく自分が意識してこなかった思考のボタンが押されたりとかね。無意識のドアが開かれていくみたいな感じっていうのがあって。また一人に戻ったときに、今度はそのことをもう一回再認識した上で問いの立て方を変えてみたりするっていうことの繰り返しをやっていっている気がするんです。何かそうすることで、一人で考え、他人と何かしらの形で共有しあい、そのことを持ち帰ってまた一人で考え、「また会おうね」って感じで会っていって、そして「また会おうね」のメンバーは実は入れ替わったりとかしている。そういう過程のなかで多様な「居場所」が後追いで生まれていっている気がします。

意味から離れて

これまで居場所を物理的な場所だけを指すのではなく、時間軸も伴いながら生まれる他者とのその瞬間瞬間の関係性が文脈になって発生する「居場所」として捉えてきたし、そういうことってほんと常に思考している状態から出てくるひとつの答えなんだと思うんですね。でも矛盾するようだけど最近思うのは、そういう思考する部分すら止めてしまえるような時間の重要性についてなんですよ。まあそれは寝ることかも知らんし、めちゃくちゃ体を鍛えるとかひたすら走るとか、無心に屁理屈言わずに修行するみたいな世界。「意味は問うな、ただこれをやりつづけたらええ」みたいな世界ってあるじゃないですか。個人的には最も苦手な世界なんですけど（笑）。そういう状態ってこれまで話してきたような思考性を進める際に、逆に必要になるんじゃないかって気がしているんです。自分で考えて、誰かとシェアして考えて、また自分で考える、みたいなことをやっていく中で、まだ全然そこまでやれてないけど、こういう思想・発想とはまた逆で、自分が得意としないようなある種の「型」とかを「ただひたすらやり続けなさい！」と命じられてやるっていう、禅とかに近いかも知れませんが、そういうものが持つ意味みたいなことをこれまた「考えて」しまうんですけどね。思考しまくる時間と、そこからも全く離れてしまう時間みたいなものが、交じり合う場所。ある種の型にはまらんような思考をするための話をしているはずやのに、ある時間はあえて型にはめてみるっていう時間を持っておくっていうこと。僕だったらドラマーのはしくれなので何にも考えずにただＢＰＭ60のメトロノームを見てずっと同じ律動を叩き続けるとかね。

「対話できないものと対話をする」感覚とも言えるかもしれませんね。もはやそこは理解不能で。対話できるものと対話をして分かり合えないかなと思いながらも何かを得ながらやっていくという回路と、もう絶対的にそこは対話できへんやろなってところの中で、ただただ何かを何の見返りもなくこなしていく――この「こなしていく」って言い方が正しいかもしれません――みたいなことっていうのは、並存して自

分の人生の中に絶妙なバランスであるといいなって気はしている。それは一人で自分と向き合う時間ともまた違った、――自分と向き合う時間っていうのは、ある種の自分のアイデンティティをずっと意識していく時間なんだけど――そんな邪念すらも入らない時間。「いやそんなごちゃごちゃ言わんとずっと歩き続けろよ!」みたいな時間を持つことの「居場所」みたいなこともあるのかもしれません。そこにすごく関心がありますね。自分ができていないだけに関心があってね。その時間を持ったときのバランス感覚はぜひ知りたいな。何人か僕の周りにもいるのよね、そういう「謎の時間」を持っている人。

対話の中でコミュニケーションしていくってことは、言葉にしていくってこともあるし、言葉になりにくいものでも、やっぱりコミュニケーションしていたら徐々に何か言葉が編み出されていく。それ自体は人間にとって必要なことなんだけども、そういう意味を生み出していく作業から離れる時間を持つことってすごく難しくて。意味から離れられる時間を持てたときに、もう一回ある時間に戻ってきてみると、普段気づかないものが見えたりとか、またそこから対話が生まれてっていうことを繰り返しやっていくってどういうことなんかなと今日改めて思いましたね。

「敵」とのつきあい方

――場を作っているときに、その人がそのつもりかは別として、自分が敵だと認識してしまうような人が来ることがあるんです。気になっているのは、敵をどう減らすかということではなくて、自分がそう思ってしまうことの方なのですが……。

その敵をどうしたらいいやろうってよりは、自分のその捉え方をどうしたらいいやろうっていうことですよね。その感じっていうのは、僕もゼロではないな、たしかに。うん、なんかその問いは、僕が今日最初の方に言った、ある種の共有できなくなった寂しさとか別れみたいなこととちょっと近い感覚かも。自分が、他人との関係において、いったい何を居心地がいいと思っていて、何にこだわっているかっていうことっていうことは、居心地のいい環境に居続けたら絶対わからなくて。何かがそこに異物が入ってきたりする状況があって居心地の悪さを感じたときに、初めて「俺ここ好きなんやな」って改めて気づいたりするでしょ。そのこと自体がすごく大事なことやと思うんですよ。変な言い方なんだけど、居心地がいいとこに居続けるっていうことによって、だんだんだん、辛くなってくるって思いが、僕はひねくれもんなのであるんですよ(笑)。逆にどんどん去りたくなってくるみたいな感覚を、ある段階で気づけた方がいいなと思っていて。そりゃ当然、話が合う人たちと一緒にいた方が気が楽だったりするし、なんかツーカーで分かりあえる仲間みたいに思えたりするよね。でもそれも永遠には続かないからね。一時的なものだし、そうやって共有できているときは幸せかも知れないけど、例えば大学卒業したら、みんな全然別々の人生歩んでいくんですよね。その別々の人生は当然共有するには限界がある。今でこそフェイスブックみたいなSNSがあるからなんとなく「ああアイツもついに子どもができたんや」とか、「アイツなんか会社で頑張ってこんないい写真あげてるな」とか、分かった気になるけど、やっぱりほとんどの部分は当然お互い分かち合えない。

段々そうなっていく過程で、僕は色んな場面にその、個々のコミュニティの中で共有しているのとは別の感覚、あるいは自分はここのコミュニティのこの部分を共有し

ているから居心地がいいと思ったけど、他の何人かは実はこの部分を別に持っていたりして、どこの部分にアクセスしてくるか検討がつかないから、俺には居心地が悪い、とかね。そういうことを感じていけると、自分がいま所属しているコミュニティをもうちょっと多面的に再認識できるっていうか、そういうきっかけにはなるからね。そういうことは必要なことなんだと思います。

だから変に敵だと感じないようにするっていうよりは、敵だと感じてしまってるねんけど、まあ「お、敵か」みたいに軽く思えるってのが素直な解決策じゃないかな。「敵って思ってるわ、今俺」、「どういうことなんやろ…?」って感じられることの方が大事かもね。

――そうかそうか、そうですね。

だって頑張ったって思っちゃうんやもんね、そこは。「あ、敵発見してしまったわ」みたいなね。「敵がいるってことは俺ここめっちゃ仲間やと思ってるわ」、「どこの部分を仲間と思ってるんやろ…、ここの」みたいな感じになって。

――何も敵だと思わないようにしようというのではなくて。

僕はそれは無理やと思う。そんないい人になれたらいいけど、僕は無理やから。ムカついたりするときも当然あるしね。感情やからついつい出てくるし。思った瞬間にそう思っていること自体はいったん認めて、そこから考える方がなんかおもろいよね。思考の順序としては。

敵って言い方はしないけど、自分にもそういう経験は日頃細々いっぱいあると思う。すごく思うってことはあんまりないけども。そういう違和感みたいなものは積み重なっているんやろなって思いますよ。

――敵だと思ったことを抑圧せずに、敵だと思わないようにしようとするのでも、敵だと思って排除しようとするのでもなく、「今自分はこの人を敵だと思った」と認めることが大事なのかなと。

そうね。敵だという思い方も色々やと思うし。すごく仲のいい友達の仲間たちがいて、急になんか自分の知らん人で、でも僕以外のメンバーとは皆友達で、みたいな人が入ってきたときに、「あ、こいつなんやろ…」みたいな思い方の敵もあるかもしれないし、たいしてこの仲間とも仲良くもないんだけども、そこにさらにもう一人現れたときに思う敵みたいなのもあるしね。要はそれって、「自分は一応この人たちのこと知っている」と思っている自負みたいな部分が崩される瞬間で、「なんや俺知らんかったんや、この人のこの面を」っていうよくわからん自意識みたいのがそこに生まれていて。だからそこに気づいていけることは、敵っていうことをなくすというよりは、いいクールダウンをしてくれるんだと思う。まぁ生きているともうそんなことの連続でもあるし、いちいち敵やと思ってたら大変やから、というか、いちいち敵にムカついてたら大変やからね、そういう風に思っていくことで、ある種の自己感情マネジメントをしていく。

「敵やと思わんとこ」っていうのもそれはそれでそんなに達観できないし、永遠にその違和感がなくなって、なんかこう、皆つながって地球村みたいな話にはならないと思うから(笑)。「みんな友達やんな」とかよう言えないですしね。

居場所の彼方にある居場所

さてさて、普通に居場所って言葉を聞いたときには「自分にとって居場所は家かな」とか「学校かな」みたいな回答もあるし、それはそれでそういう考え方も全然間違ってないと思うんだけどね。でも「居場所って何？」って言われたときに、僕にとっては、居場所って考え方自体から自分でその場その場即興で作り上げていったりとか、今この行為そのものが居場所であるとか、モノ的ではなくコト的であるとか、そういった思考をしながら、ある種の「ライブ感」を大事にしながら居場所の意味自体を変えていくってことが大事な気がしています。「居場所」っていう考え方に縛られないっていうか。その方が、居場所って言葉が持っているであろう「安心してある時間を過ごせる」っていう風なことに近いことを実は結果的にできるかも知れない、っていう妙な確信はあって。自分がいわゆる物理的な「場所」にこだわっていなかったりとか、働き方とか、他人との関係性の持ち方とか、自分のアイデンティティとかも含めて色々と拡散的にばらけさせてあれこれ同時多発的にやっているタイプの人間なので、正直今日みたいなお答えにならざるを得ないとこがあるんです。だから考えたくて考えている部分もあるけども、そう考えないと動きにくいっていうか、やっていきにくい部分もある。固定して「ここがホームです」みたいな考え方を持ったときに失うものも多くあって、そういう風にある種、居場所自体をブリコラージュしていく感じを持ち続けられるっていうことは、それはそれで幸せなことやなと思っているんですよね。

そういう考え方もあって、誰かが居場所と思うことを、相手が居場所と思うタイミングって――そのときは居場所って言葉は多分使わないんだけど――、そういう関係を取り持てる素敵な瞬間ってあると思うから、やっぱりね、そこかなと。そこを、できるだけ見落とさないように敏感に丁寧に注力していけたらなという気がしています。

アサダワタル

〝日常編集家〟という名の放浪芸人。一九七九年大阪生まれ。公私の狭間、異分野間を漂泊しながら、既存の価値観を再編集する表現を、文章、音楽、プロジェクトを通じて創作する。二〇〇二年、バンド越後屋のドラマーとして二枚のCDをリリースしバンドは解散。二〇〇三年以降、ソロ名義の大和川レコード、ユニットSJQ（HEADZ）でのライブやCM・映画での演奏活動を行う。その後、表現活動を〝音〟から〝場／事〟に拡張し、各地域に滞在しながら行うコミュニティプロジェクトの構想演出、教育・福祉現場における音楽ワークショップの実施、それらに纏わる文筆活動を開始。近年は自宅の一部を他者に開放する「住み開き」を提唱。著書に『住み開き　家から始めるコミュニティ』（筑摩書房）など。各メディアでの連載も多数。これまでの活動に関しては、ウェブサイト「日常再編集（http://kotoami.org/index.html）」に詳しい。臨床哲学研究室とは以前授業のゲスト講師としてお招きしたご縁がある。

アサダワタルさんインタビュー後記

2013年の1月、授業にゲストとしてお越しいただいたとき、「アサダさんのような生き方をする上で大切な心構えは何ですか？」という質問をしました。お答えを今もよく覚えています――「何事にも無関係だと思わないようにすること」。しばらくして、「居場所」をテーマに『メチエ』を作ろうと決めたときにも、この言葉は私のどこかで響いていました。

インタビューの中で、とりわけ心に残ったお話が二つあります。一つは、居場所とはそこにいれば必ず安心できるホームのようなものではないということです。「ここさえあれば安心」と身をすっかり場に委ねてしまうことは、居場所をつくることとは似て非なるものであるように思います。

このことは、居場所にとって「場所」と同等かそれ以上に「時間」が重要だという二つ目のお話に結びつきます。時間を重視することは、変化に敏感であることに他なりません。一緒にいる他人の変化、自分自身の変化、あるいは関係の変化。変わるのは関心の向かう先かもしれないし、抱えている問題かもしれません。生が時間とともにあるかぎり、何かに出会い、見舞われ、手に入れ、あるいは失いながら、私たちは変わっていきます。居場所を探し求めるとき、安心して話せる相手がいることと同じくらい、自分がいま気になることや考えたいことに目を凝らすことも大切なのです。

だからこそ、ある居場所がなくなることを恐れなくてもいい。変化しながら移動し、新たな関心や問題に応じたつながりに開かれることで、居場所は編み直されるからです。このことはもちろん、その途上で別れがあることを含意します。別れは寂しいものですが、自分や相手の変化から目を背けてまで一つの居場所にこだわることは別れ以上の悲しみを生むかもしれません。依存症をもつ人たちの回復を支える人間関係をめぐる当事者研究から生まれた「「ちょっと寂しい」くらいがちょうどいい」という言葉も思い出されます（上岡陽江・大嶋栄子、『その後の不自由』、医学書院、2010年）。

何事にも無関係だと思わないようにすることと、何に関係があるのかをよく考えること。居場所をつくるとき、心に留めておきたいアイディアです。アサダさん、ありがとうございました。（川崎）

学校、クラス、会社、国家、家族…。私たちが所属するとされる様々な単位がある。思えば私はそのどれからも逃げてきた。最初は居心地がよくても、いつかは居づらくなって、次の場所へ移っていく。その繰り返しだ。学校やクラスといった単位で居場所を考える限り、その場所に合うか合わないかでしかその場所を考えられない。

アサダさんは、そうした既存の単位を超えたところに目を向けようとする。無論そうした単位の影響はあまりにも大きく、それを無視し去ってしまうことは、現実を見誤らせるだろう。しかしいくらそうしたものが入り込んでいようとも、実際に存在するのは、その単位自体ではなく個々の人間同士の関係なのではないか。

そこに視線を移し替えたとき、私たちは場を享受する者ではなく、場に参与する者へなってゆく。居心地のよい場があるのではなく、自分たちでそれを紡ぎだすのだ。

これは旅人の生き方だとも言えるだろうか。放浪し、自分のできることを軸に人と関係を結び、時に一所に留まり、そしていつかは再会を期しながら別れていく。これは決して特殊な生き方などではない。私たちは皆、時間の中で絶えず変わりながら生きているのだから。（菊竹）